



JICA だより



ブルキナファソ
(2010～12年派遣)
峰崎泰昌さん(36)
江田島市

私の頭の中はずっと空っぽだった。やりたいこと、将来のこと、ましてや日本の行く末や世界の人々にも興味が湧かなかった。そこに「富のチャンパングラス

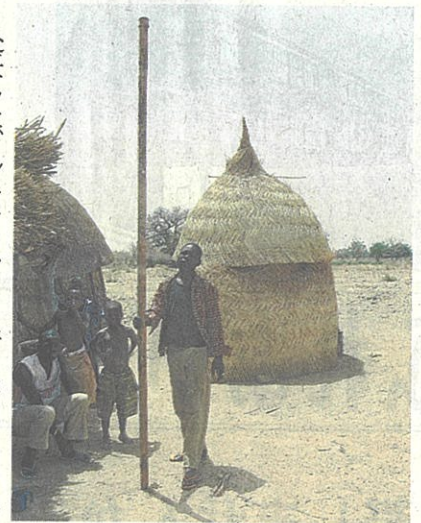
(一部の富裕層が世界の富の大部分を所有している事実を图示したもの)」「という言葉が入ってきた途端、まるでギター空洞のように反響した。「なぜ日本人の自分は、なに不自由な地域。砂ぼこりには参

イメージと違う「貧困」

ない暮らしができていないのか」「貧しさとは何か」と考え始めた。貧困への興味をきっかけに青年海外協力隊に参加しようと決めた。

だが、首都もごんまりとしていて散歩しやすい。米やパンの主食にもなじみ深い物もある。マンゴーや、炭で焼いたトウモロコシ、

赴任したブルキナファソはサハラ砂漠に近いアフリカ西部の内陸国。世界で最も貧しい国の一つだが平和な地域。砂ぼこりには参



さびついたポンプの管を持つ村の住民。各国の支援でポンプは多くあるが、維持管理は行き届かず放置されるケースも多い

ゴマのおそして、協力隊だと言いつ菓子もあつどこかでブルキナファソった。電の人々に偏見を持っている気や水道自分にも気づいた。シヨックだったのは「ヤツラ(西側諸国)が世界をバラバラにした」と歌うレゲエの歌詞。

任期を終える頃には自分なりに悟っていた。「アフリカのことはアフリカの人々が考えて決めればいい。自分がやるべきことは日本にある。広島に帰ろう」。そんな思いを持って帰国後、農家を志した。キュウリの面倒を見る日々を過ごしている。